

A大学病院における看護師の 看取りに関する困難感の要因分析と教育計画の検討

氏 名 安高久美子

指導教員 松永 裕己

要旨

A大学病院の看取りケア教育は、看護師個人のスキルに依存し、ケアの最低限の質の保証ができていないかどうかが不明な状態であった。そのため、本研究では、A大学病院の看護師に対して、質問紙調査を実施し、①看取りに関わる看護師の看取りに関する知識・技術・姿勢・困難に感じていることなどの実態把握、②看取りに関する看護師の困難感の要因分析により、教育的課題の抽出（教育ニーズの把握）、③看取りケアの質の現状把握を行った。これらを踏まえ、知識マネジメントおよび人材マネジメントの観点で、看護師の困難感や看取りケアの現状に合わせた実現可能な教育計画を検討することを目的とした。

調査結果の分析には、多変量ロジスティック回帰解析を用いた。調査結果より、看護基礎教育と就職後の徒弟教育が、主な学習背景であることが裏付けられた。看取りに関する姿勢は、高い倫理観と使命感を裏付け、経験年数での差は目立たなかった。看取りに関する困難では、医療者間、家族との間のコミュニケーションに困難を感じている看護師が多く、医師-看護師間のコミュニケーションは、経験年数が上がるほど困難を感じていた。家族との間では、経験年数が少ないほど困難であった。また、医師-看護師間で看取りに関する困難を感じている場合、家族とのコミュニケーションに影響することがわかった。さらに、学習ツールの使用頻度が低い結果であったが、学習ツールを使用している場合、家族とのコミュニケーション困難感が少ないことも明らかになった。年代で比較すると、4-9年目の中堅クラスが、知識や技術を求めていることもわかった。

これらの結果から、単に知識や技術を習得するような学習ではなく、コミュニケーションスキルや、場面对応力を向上させるような研修の必要性が示唆された。「理解した」段階から「行動に移せる」ようにするために、SECIのサイクルを回し、知識の定着化を図ることが必要である。これには、知識・技術を補う教育、考える力やコミュニケーション能力を上げる教育、場面对応力を上げる教育などを段階的に実施し、ロールプレイやシミュレーション教育を活用しながら内面化を促進していくことが有用と考える。最初の教育ターゲットは、特に知識や技術を求めているものが多かった4-9年目の看護師や、リンクナースを巻き込んでいくことで、好影響がでることを期待する。長期的な展望としては、教育を看護師全体から多職種まで拡大し、高齢多死社会に対応できるような、病院全体の看取りケアの底上げを図って行く予定である。